

ユネスコスクールの今

ひろがり つながる ESD推進拠点

UNESCO Associated Schools in Japan as Bases for Promoting ESD
- Current Status and Way Forward



「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」 から読み解く日本のESDの成果と課題

聖心女子大学教育学科 教授
永田佳之

ESDは世界を変えるだろうか。

そう問う前に、別の問いを立ててみよう。

ESDというビジョンを手がかりに、わたしたちは、

教育という営みそのものを変えることができるだろうか。

その問いへの探求を通して、教育という営み全体をESDと呼べるまでに

高めることができたとき、ESDという言葉はその役割を終えるだろう。

教育とはほんらい、社会と人類とを持続発展させていく源泉だから。

友よ、その源泉をまず、みずからのうちに抱こう。世界を変える力の源は、

ひとりの人間の自由な精神の発露にあるのだから。

はじめに

2014年11月8日、岡山大学で開催された第6回ユネスコスクール全国大会で「ESD推進のためのユネスコスクール宣言」が採択された。本論考で扱うこの宣言(以下、「岡山宣言」)の策定過程では「宣言に託すメッセージ」が全国的に公募された。宣言起草のための大切な情報として活用するために全国のユネスコスクールに「岡山宣言」に盛り込みたいメッセージを作成してほしいという呼びかけのもとに、想いの込められた言葉が各地から寄せられた。

冒頭に掲げたのは、そのうちの一遍、横浜シュタイナー学園から寄せられた「詩」である。実際に、宣言の一部として採用された言葉ではないが、ESDの神髄を捉えている代表的な言葉として掲げることにした。ここでは、宣言案策定はこのような「現場からのメッセージ」に敬意を払いつつの作業であったことを記しておきたい。

さて、筆者は、ユネスコスクール世界大会 全国大会：宣言起草・事例選考委員会 宣言ワーキンググループ代表として宣言が産み落とされる

までの一部始終に伴走する機会をいただいた。宣言文採択までさまざまな紆余曲折があったが、ESDにかかわる実に多くの人々から「大切な何か」を伝えるために様々な想いが寄せられ、その集大成がひとつの宣言となったと言える。ここでは、その起草プロセスについて触れた後に、宣言文の読み解きを通して日本のESDの成果と課題を浮き彫りにする。

1. 宣言文採択までの経緯

「岡山宣言」は、第1に日本のユネスコスクール関係者に向けて、第2に世界のユネスコスクール関係者に向けて、第3にユネスコスクールを支援する地域・国の政策決定者、及びユネスコ(本部)に向けて発信された。宣言の発信元は公式には上記の全国大会の参加者であるが、採択に至るまでのプロセスを考慮すれば、日本のユネスコスクール教職員を中心とする現場からの宣言であると言ってよい。

一連の作業は、できるかぎり〈ユネスコスクールの声〉を反映させるべく、オンライン上の公募で学校から寄せられた146の優良実践事例や冒頭で紹介したような「宣言に託すメッセージ」として寄せられた25の言葉に傾聴し、過去の全国大会や地域交流会、その他の関連催事の記録などからキーワードを拾いだした。

それらを土台に、ESD及びユネスコスクールに造詣の深い教員、研究者そしてESD実践者から成る上記の宣言ワーキンググループの専門家により、国際的にもアピールする宣言案として相応しい内容になるように、丁寧に言葉が紡がれていった。こうして作成された宣言案は、パブリックコメントや文部科学省との協議を経て、上記の全国大会で公表され、そこの提案も踏まえて最終案が策定された。

検討資料として共有されたのはこれまでに採択された国際的なユネスコスクールやESD関連の宣言である。宣言起草の事務局を担ったのは、ユネスコスクール事務局として、ユネスコ本部と国内の学校現場との架橋にも尽力してきたユネスコ・アジア文化センター(ACCU)である。

1 次の7つの宣言が共有された。1) ユネスコスクール50周年「オークランド宣言」(2003年)、2) ホリスティックESD宣言(2007年)、3) トビリシ+30「アーメダバード宣言」(2007年)、4) DESD中間年ユネスコESD世界会議「ボン宣言」(2008年)、5) 東京HOPE宣言(2009年)、6) トビリシ+35「トビリシ宣言」(2012年)、7) ユネスコスクール60周年「国際フォーラムによる提言」(2013年)。

検討過程での課題は次の諸点に集約される。第1に宣言としての性質上、文字数や形式に制限があり、ESDの射程に置かれる幅広い領域の文言をコンサイスにまとめる必要があったこと。第2に全国から寄せられた多様な事例やメッセージのエッセンスを言葉化し、盛り込んでいくこと、第3に優良事例のみならず、一般のユネスコスクールの現状に想いを馳せ、成果と課題を捉えること、第4に過去のユネスコスクール関連の宣言を参考に、日本のユネスコスクール史に残る宣言として相応しい表現にしていくこと、である。

ワーキンググループでの審議では、これまでの10年の成果と課題が明らかになるように宣言を策定することが確認された。しかし、課題の列記は宣言にふさわしくないで、「提案」や「コミットメント」の中のポジティブな表現として記すことになり、最終的に次のような宣言の構成に至った。つまり、1)「私たちにとってのESD」(「詩」から始まる導入)、2)日本のユネスコスクールによる「国連ESDの10年」の成果、3)日本のユネスコスクール：私たちのコミットメント(誓い)、4)学校によるさらなるESD推進：ユネスコスクールからの提案、の4部構成である。

2. 「岡山宣言」を通して見えてくる日本のESDの課題

「岡山宣言」を目にしてまず気づくのは、宣言の冒頭に「詩」が掲げられていることである。上記の「宣言に託すメッセージ」として東京都稲城市立稲城第二小学校から寄せられた一編の詩、つまり子どもの変容を子どもの視点から叙述したユネスコスクール教員による言葉にもとづく「詩」が冒頭に相応しいメッセージとして選ばれた(文末Box参照)。採択までの過程で、宣言に「詩」を添えることに対する反対意見もあったが、議論を重ねた結果、採用に至った。

採用されることになった理由の一つは、この「詩」が日本のESDの特徴である「つながり」を巧く表しているからであった。少々大げさな表現になるが、近代化の過程で人間と自然、人間同士のさまざまな関係性は分断されてきたが、ESDによってその関係性の再構築が見られるようになった。しかも、近代以前では想いもよらなかったであろう「遠い未来」や「地球」とのつながりも構築されようとしている — そんな教育の在り方を巧く表現した「詩」として評価されたのである。

さて、上に触れたように、この10年の成果と課題を明らかにするという意識のもとに、宣言文は編まれた。ここでは「岡山宣言」の前半に表された成果と後半に表された課題に盛り込まれた一つひとつのキーワードからユネスコスクールの、ひいては日本のESDの成果と課題を読み解いてみたい。以下に、「岡山宣言」を通して日本における「ESDの10年」の①明らかな成果、②道半ばだが達成されつつある成果、③残された課題に大別して述べることにする。

1) 明らかな成果

●発展基盤の確立

「日本のユネスコスクールによる『国連ESDの10年』の成果」で描かれているように、この10年でESDが発展していくための基盤(インフラ)が整備された。教育振興基本計画にESDが盛り込まれたり、ユネスコスクールの量的・質的な拡充が唱えられたり、また学習指導要領に持続可能な社会や未来が意識された言葉が明示されたりしたことは、世界的に見ても類い稀な発展基盤の整備であると言える。こうした確固たる基盤は、ことに公教育でのESDの浸透に少なからぬ影響を与えてきた。政府はそれなりの役割を果たすべく努力を重ねてきたと言えよう。

●多様な「つながり」の生成

前述の通り、日本のESDの特徴として「つながり」を重視していることが挙げられる。ESDのお陰で、学校と地域や世界との間に架け橋がかかったという声は少なくない。こうした空間での「つながり」のみならず、過去や未来と現在に生きる教師や子どもとをつなげたのもまたESDであり、宣言文では「未来社会の担い手であるという意識をもつことができました」と表されている。現在の環境や社会問題が未来にどのような影響をもたらすのかについての想像力を喚起するESDの授業は少なかつた。「ESDカレンダー」などの普及により、教科の垣根を越える試みが広まったことも注目に値する。さらに、「10年」の後半に起きた東日本大震災で甚大な被害を受けた東北の人々とのつながりや学び合いもESDを通して展開された。

●「総合的な学習の時間」の活用

宣言文にも示されているように、「総合的な学習の時間」等を活用した体験的・探求的なプロジェクト等の浸透や問題解決学習の重要性に対する認識が広まったことはひとつの成果であろう。「総合的な学習の時間」以外の教科でも、「地域学習と地域でのアクション」が多く生まれ、学校と地域の垣根を低くしたと言える。後述するように、「総合的な学習の時間」に留まってしまう傾向は見られたものの、統合的な学びの体験を通して「持続可能な未来の担い手」としての意識が子ども達にも育まれた意義は少なくない。

●防災への意識

「10年」の間に期せずして起きた一大事件は東日本大震災であった。ESDへの取組みを日常でつづけてきた地域では、地域住民のいのちを守ることとしなやかに復興していくことにESDの貢献があったと言われている。特に宮城県気仙沼市での防災教育をはじめとした取組みは世界的に見てもESDの優良実践であると言える。こうした地域では、ESDは防災・減災意識をさらに高めており、「10年」の後半にユネスコ本部等において強調されるようになったESD傘下の三大領域である「気候変動」「生物多様性」「防災（災害リスク削減）」の一領域はESDによってより充実化されたと言えよう。

2) 道半ばだが達成されつつある成果

●批判的思考

「ESDの10年」で「体験的・探求的に発見し、解決していくためのプロジェクトやカリキュラムが開発された」ことは成果として捉えられている。しかし、「10年」の当初から標榜されてきた批判的思考や中長期的思考などの「高次の思考技法」（UNESCOによるESDの国際実施計画）については、道半ばと言わざるを得ない。それはESDの構想時から温められ、「10年」を通して強調されてきた思考であるにもかかわらず、定着したとは言い難い。このことを反映して、宣言では「批判的思考や判断力（中略）が役立つことが理解されました」という表現にとどまっている。

●時間意識

確かに、冒頭の「詩」にも挙げられているように、ESDを通して「時間」を意識するようになった生徒は少なくないであろう。しかし、地球温暖化（気候変動）に代表される現在の持続不可能性が過去のどのような開発から生じているのか、また現在の持続不可能性を助長するような現代人の豊かさを追求するライフスタイルや行動が未来にどのような影響をもたらすのかについて、長中期的な思考を養う学習は決して多くはなかったと言えよう。

●生徒の自尊感情と参画

ESDのプロジェクトやアクションを通して元気になった子どもや教師は少なくない。「リオ+20（国連持続可能な開発会議）」の「私たちが望む未来」宣言でも強調されたように、若者のエンパワメントは世界共通の課題となっており、ESDではこうした課題に対する具体的な事例が生まれたと言える。その点、宣言文では「自己肯定感の低さが問題とされる日本の子どもたちの内なる力を発揮させ、自信の獲得につながりました。」と表現されている。しかし、それが一過性のエンパワメントなのかどうかは一考に値する。「コミットメント（誓い）」に「ESDの魅力を広く社会に伝えるため、児童生徒の変容、教師の変容、学校・地域の変容を明確に示します。」と記されているように、「何をやったか」ではなく、ESDを通して生徒や教師が日常的に「どう変わったのか」を意識することが肝要であり、価値観やライフスタイルというレベルでの変容は少なくとも十分に共有されていないと言えよう。

●新たな教師の役割

宣言文には「ESDのビジョンに導かれた教師の意識に変容が生まれました。知識を伝達するばかりではなく子どもとともに学びながら、子ども中心の学びをデザインし、コーディネートする教師の姿勢は子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるといふ事例が見られるようになりました。」と明記された。つまり、ESDによって教師は知識の伝達者ではなく、デザイナー、コーディネーター、ファシリテーターとしての役割を担うようになったのである。ただ、「事例」が見られるまでにとどまった感否めず、こうした裾野が今後広がるかどうかについてもユネスコスクールに期される社会的ミッションであると言ってよい。

●自己変容と社会変容

「岡山宣言」では、ESD を実践する上で変容する教師の姿勢が子どもたちを変え、子どもたちが変われば学校が、学校が変われば地域が変わるといふ実例が見られるようになったという件がある。まさに他者(生徒)を変えようとする教育から、教師自らが変わり、その結果、生徒も変わり、学校や地域も変わる内発的な教育への変容が垣間みることができたというのは、希少なながらも「10年」の成果であった。このような持続可能な社会への内発的な発展観は「自らと社会の変容のための学習」として「10年」の後半でユネスコへの文書でも強調されるようになった。しかし、こうした考えの普及はまだ端緒にすぎたばかりである。

3) 課題

●グローバル・イシューへの取り組み

宣言の「コミットメント(誓い)」にテーマ学習・協働学習として「気候変動、生物多様性、防災、持続可能な生産と消費等」の国境を越えたグローバルな課題が挙げられている。上記のグローバル・イシューは、国際的にはユネスコをはじめ、ESDの推進機関が「10年」の当初から強調してきたトピックである。ところが、日本では、どちらかという地域に強調点が置かれ、地球規模の問題解決は十分に組み込まれてこなかったという問題がある。国際的に見ると、日本のESDは地域活動に矮小化されているという見方もできよう。国境を越えた気候変動や生物多様性というグローバル・イシューに取り組んでこそ、ESDのダイナミズムは発揮されるのではないだろうか。

●アジアの近隣諸国との持続的な交流と協力関係の構築

この10年で前述のバルト海プロジェクト(BSP)のようなプロジェクトは日本で生まれたのだろうか。その間、東アジアの関係性は決して望ましい状況にあったとは言いがたいが、そういう時にこそ、ユネスコスクールはユネスコの理念である平和・非暴力の大切さをアピールできるようなプロジェクトを近隣諸国の学校と進めることが期待されていたのではないのか。このことは、ユネスコスクールが標榜するミッションからして、明らかである。

既述の通り、日本のESDは地域活動において優れた活動を展開し、多くの成果を挙げてきた。その一方で、BSP等に見られる国境を越えた学校同士の問題解決学習は積極的に推進されてこなかった。「コミットメント(誓い)」にも「近隣のアジア諸国のユネスコスクールとのテーマ学習・協働学習」が課題として明記されたように、海外の優良事例から学び、東アジアでも気候変動や大量消費社会などの共通の課題に海を越えて共に取り組むことが求められている。²

●持続可能な生産と消費

「岡山宣言」の「成果」にはなくて、「コミットメント(誓い)」にある言葉の一つに「持続可能な生産と消費」がある。この言葉は、ユネスコ本部がESDの具体的な取り組みとして「10年」の後半で強調した「気候変動」「生物多様性」「防災(災害リスク削減)」という3つのトピックに加えて、最終年の世界会議の直前に加わった4つめのトピックでもあり、「岡山宣言」でも最後の段階になって挿入された。既述のように、ESDの鍵概念が自己変容であるとするれば、持続可能性に関する知識をいくら習得したとしても、自らの行動やライフスタイルがそれに反したものであれば、どこかそぶいたESD実践となってしまう。教師自らがまずESDに則った「持続可能な生産と消費」活動を実践し、問題意識を内在化した上で生徒と学び合い、行動を起こしていくことが期待されている。

●価値観・行動・ライフスタイルの変容

「10年」を評価する上でもっとも重要な文書である「国際実施計画」には、ESDでは「価値観、行動、ライフスタイル」を持続可能な未来に向けて変容させていくことが目指される、と記されている。ここでは一時の変化(change)という言葉ではなく、みずからの一文化として内在するような変容(transform)という言葉が用いられていることに注目したい。確かに、これまでも子ども達によるアクションが見られる授業もあったのかもしれない。しかし、それは一過性のものであるかどうかを見極めることが肝要だ。ESDによって学校で節水や節電をするようになったとしても、深い次元で価値観が変わっていないのであれば、恐らくその

² 萌芽的ではあるが、アジア諸国の国境を越えたESDの促進のための協働学習も生まれつつある。例えば、ESD Riceプロジェクト(Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion through rice)が挙げられる。詳細は、次を参照。http://esdriceproject.com

生徒は自宅や地域では浪費をしている可能性はあろう。問題解決学習はESDによってより活用されるようになったが、問題の解決で留まるのではなく、問題を生み出さないような価値観へと深い次元で変容されていなくてはならない。問われるべきは、教師や生徒の中でESD(的な価値観)が内在化しているかどうか、換言すれば、「ESDを生きている」か否かである。

3. むすびにかえて

おそらく上記以外にも、日本のユネスコスクールの課題は指摘され得るであろう。例えば、宣言文の成果の節ではなく、課題の節に現れる「ジェンダー」のように、ユネスコスクールであればこそ意識をもって取り組んでしかるべき課題にほとんど未着手の領域もある。

また、GAPそのものについても、「私たちは、さまざまな主体との対話と連携を通して、「国連ESDの10年」の後継プログラムである「ESDに関するグローバルアクションプログラム(GAP)」の5つの優先行動分野をつないでいきます。」と「コミットメント(誓い)」に記されているように、政策・学校等の組織全体での取り組み・教師・若者・地域のそれぞれの領域が有機的に関連づけていくことの重要性が説かれている³。

国際実施計画等に示唆されているように、ESDはそもそも近代化の過程で分断された学びをホリスティックな営みに変えていく使命を帯びている。にもかかわらず、GAPでは5つの領域が別個に活動しているかのような構図が描かれてしまっているのである。この点、ESDの提唱国とも言える日本がGAPのよき牽引役を務めるためにも、政策と実践、学校と地域、教師と若者などを分断しない形で進めていくことが肝要である。これは政策策定者のみならず、現場の教師の意識の課題でもある。例えば、政策と若者、学校と地域というGAPの一見独立したかに見える領域を有機的に関連づけていく感性が求められているのである。

このように、ぜひとも各々のユネスコスクールやESD関係団体で、「10年」を終えたこの機に宣言文を「素材」にしてこれまでとこれからのESDについての対話を深めていってほしい。

3 「ESDに関するユネスコ世界会議」で採択された「あいち・なごや宣言」にも、相乗効果もたらされるような手法で5つの領域を推進していくことが強調されている。(同宣言第13項)

最後に、冒頭に掲げた「詩」について触れ、本論のむすびとしたい。この詩について、冒頭に「ESDの本質を捉えている」と表した。その理由は自明である。「国連ESDの10年」がスタートする前にユネスコ本部で策定された国際実施計画には、ESDの目的は既存の教育の「再方向づけ(re-orientation)」であると明記されている。どこへの方向づけかという、もちろん持続可能な未来への方向づけである。つまり、我々はESDというビジョンを共有することにより、地球社会を持続不可能にしつつある価値観や行動、ライフスタイルに影響を与えてきた旧来の教育の在り方じたいを変えていくというのが、ESDの本来の目的なのである。実は、最終年の締めくくり世界会議においても国際実施計画と照らし合わせる形でESDの本格的な評価が行われなかったことに対して、「10年」のあいだユネスコ本部でESDモニタリング評価専門家会合の一委員として世界各地のESD実践をモニターすることに従事してきた筆者にとっては内心忸怩たる思いがあった。その意味で、ESDの神髄について再び考える機会を与えてくれた「詩」に感謝しており、ユネスコスクールからこうしたメッセージが生まれたこと自体が救いでもあった。

教育とは、さまざまな現実と妥協をしつつ、形づくられてきた産物なのかもしれない。しかし、現実と拘泥しすぎると、教育ではなく訓練となってしまう。最近のグローバル人材を意識した能力育成などはその典型として見なすこともできよう。教育は人材育成と同義ではない。さまざまな教育宣言に表明されてきたように、教育が教育たるには、教育基本法(第一条)に明記されている人格の形成が何らかの形で保障されるための知恵が欠かせないのではないか。その知恵の一つは、とかく現実世界に拘ってしまいう我々に「ビジョン(幻影!)」を抱かせるような言葉の共有であろう。グローバル化を意識した活用力や有用な知識の涵養がこれまでにないほどに唱和される昨今である。そんな趨勢の中、ESDをビジョンとして捉えることが、ポスト2014年の最重要課題なのかもしれない。

子供たちの学びの中にESDの考えを取り入れることによって、学びは3つのつながりをもつ。そのつながりの中で、学びは価値を増し、子供たちの心の中に生き続け、持続可能な未来を創造する力となっていく。

●子供たちの学びの中に、「人とのつながり」を

私とあなた 私と学校のみならず 私と地域のみならず 私と他の地域のみならず
私と世界のみならずへと つながっていく。

だから、私は、見えないあなたと励まし合い、支え合える存在であるという尊さに気づき、何か行動したくなる。

●子供たちの学びの中に、「空間とのつながり」を

ここからそこへ 教室から校庭へ 校庭から地域へ 地域から私の国へ
私の国からあなたの国へ そして世界へ 地球へ 私の世界は広がっていく。

だから、私は、どの場所にも かけがえのない空が息づいているということに気づき、何か行動したくなる。

●子供たちの学びの中に、「時間とのつながり」を

今と明日とのつながり 今と過去とのつながり 今と近い未来とのつながり
今と遠い未来とのつながり 私の今は過去や未来と つながっていく。

だから、私は、この大きな時間の流れの中で、大切な責任を負っているということに気づき、何か行動したくなる。

注：上記メッセージ（「詩」）は、宣言の冒頭に記載するにあたって、メッセージを寄せた東京都稲城市立稲城第二小学校（ユネスコスクール）の承諾を得て起筆段階で若干の改訂を加えている。

Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan: Achievements and Issues of ESD in Japan

Nagata Yoshiyuki
Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo

Can ESD change the world?
Let us ask another question before asking that:
Can we change education with the help of the vision of ESD?
When we, through the search for the answer,
make the whole activity of education improve
to the level that can be called ESD,
the word ESD will have fulfilled its role.
Education is essentially a source to develop society
and humankind in a sustainable manner.
Dear friends, hold the source in your arm first.
The source of the power to change the world
lies in the expression of the free spirit of an individual.

Introduction

In November 8, 2014, the Okayama Declaration of the UNESCO Associated Schools in Japan Promoting Education for Sustainable Development (ESD) beyond the United Nations Decade of ESD was adopted at the sixth National Meeting of UNESCO Associated Schools held in Okayama. In the process of the creation of this Declaration (the "Okayama Declaration") covered in this discussion, "messages for the Declaration" were asked from the general public nationwide. In response to the request to create a message to include the Okayama Declaration to the UNESCO Associated Schools nationwide for use as important information for the drafting of the Declaration, words full of feelings were collected from all over Japan.

The opening sentences are one example, a poem from Yokohama Steiner School. Although this was not actually adopted as part of the Declaration, I decided to show it as typical of words submitted that capture the heart of ESD. Here I would like to mention that the creation of the Declaration was work showing respect for those "messages from the field."

I had an opportunity to witness the whole story of the birth of the Declaration as a representative of the Declaration working group, the Committee on Drafting of Declaration and Selection of Cases, the National meeting and International Forum of UNESCO Associated Schools. Although there were

twists and turns until the Declaration was adopted, quite a lot of people who are involved in ESD gave their feelings to tell "what they cherish," and the compilation of them has made a Declaration. Now I would like to highlight the achievements and issues of ESD in Japan through interpreting the Declaration after mentioning the drafting process.

1. Background of the adoption of the Declaration

The Okayama Declaration was sent firstly to the parties concerned in the UNESCO Associated Schools in Japan, secondly to the parties concerned in the UNESCO Associated Schools overseas, and thirdly to the policy decision makers in the regions and countries that support the UNESCO Associated Schools, and the UNESCO (headquarters). The senders of the Declaration are officially the participants in the National Meeting mentioned above, but considering the process for the adoption, it can be said that it is a declaration by the field, mainly the teachers of the UNESCO Associated Schools in Japan.

In order to reflect the voices of the UNESCO Associated Schools as much as possible, the series of work focused on considering 146 good practices submitted online by schools and 25 messages submitted as the "messages for the Declaration" remarked on at the beginning, and picking up key words from the records of the past national meetings, regional networking events, and other related events.

On the basis of the above, the experts of the Declaration working group mentioned above, consisting of teachers and scholars who have great knowledge on ESD and the UNESCO Associated Schools, and practitioners of ESD, created the sentences carefully to have contents appropriate as the draft of a declaration making an international appeal. The draft of the Declaration made in this way was, through the public comment system and consultation with the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, made public at the National Meeting stated above, and the final version was developed according to the proposals made there.

What were shared as the materials for discussion were international declarations in relation to UNESCO Associated Schools and ESD that had been adopted. The executive office that undertook the drafting of the Declaration was the Asia-Pacific Cultural Center for UNESCO (ACCU), which as the Office of UNESCO Associated Schools, made efforts to create a bridge between the headquarters of UNESCO and schools in Japan.

The issues in the process of discussion are summarized in the following points: To begin with, there was a need to make a wide range of words within

the scope of ESD concise, due to the limitation on the number of letters and the form by the nature of a declaration; secondly, the essence of the various example cases and messages collected nationwide must be put into words

1. The following seven declarations have been shared: 1) Auckland Declaration on 50 Years of UNESCO Associated Schools (2003); 2) Declaration on Nurturing Holistic Approaches Towards ESD (2007); 3) Tbilisi Plus 30, Ahmedabad Declaration (2007); 4) Bonn Declaration, UNESCO World Conference on ESD (2008); 5) Tokyo Declaration of HOPE (2009); 6) Tbilisi Plus 35, Tbilisi Declaration (2012); and 7) Proposals by the International Forum on 60 years of UNESCO Associated Schools (2013)

to be included; thirdly, the achievements and issues must be considered by giving thought to not only good practices but the current situations of the UNESCO Associated Schools in general; and lastly, by reference to the past declarations in relation to UNESCO Associated Schools, appropriate expression must be given as a declaration which will go down in the history of the UNESCO Associated Schools in Japan.

In the discussion of the working group, it was determined to develop the Declaration to clarify the achievements and issues of the last ten years. However, listing issues is not appropriate for the Declaration, and it was decided to mention them as positive expressions in the “proposal” and “commitment,” which in the end led to the following structure of the Declaration. It consists of four parts, which are: 1) What ESD means to us (introduction starting with a poem); 2) Outcomes produced by UNESCO Associated Schools in Japan under the UNDESD; 3) UNESCO Associated Schools in Japan: Our commitment; and 4) Further promotion of ESD by schools: Proposal from UNESCO Associated Schools.

2. Problems in ESD in Japan seen through the Okayama Declaration

What you notice first when reading the Okayama Declaration must be the poem indicated at the beginning of the Declaration. A poem given by Inagi Municipal Inagi Daini Elementary School in Tokyo as a “message for the Declaration” mentioned above, which is a poem based on the words by a teacher at a UNESCO Associated School describing the changes of children from the viewpoint of children, was selected as the message appropriate for the opening sentences (see the box at the end). Although in the process of the adoption there were opinions against adding a poem in the Declaration, it was eventually adopted after a lot of thoughtful discussion.

One of the reasons for the adoption was that this poem nicely portrays “connectedness,” which are the feature of the ESD in Japan. This may be a slightly exaggerated expression, but various relations between people and nature, and between people have been broken in the process of modernization, and ESD has been rebuilding such relations. In addition, the connectedness with “the distant future” and “the earth” are about to be built, which must have been unimaginable in pre-modern times – this poem was appreciated because it portrays such a way of education.

As described previously, the Declaration was prepared based on the intention to clarify the achievements and issues of the last ten years. Here I would like to find out the achievements and issues of the ESD in UNESCO Associated Schools and also in Japan from each key word included in the achievements in the first half and the issues in the second half of the Okayama Declaration. Now, I am going to explain each of the (1) apparent achievements, (2) accomplishments which are on their way to be achieved, and (3) remaining issues in the Decade of ESD in Japan, based on the Okayama Declaration.

1) Apparent achievements

● Establishment of the development base

As described in the “Outcomes produced by UNESCO Associated Schools in Japan under the UNDESD,” the base (infrastructure) to develop ESD was established in the last ten years. It is an extraordinary improvement of a development base from a global perspective that the Basic Plan for the Promotion of Education has included ESD, the quantitative and qualitative expansion of UNESCO Associated Schools is advocated, and the Curriculum Guidelines (Course of Studies) specifies the words with an awareness of a sustainable society and the future. This solid base has had a considerable influence upon the penetration of ESD, especially in public education. I must say that the government has kept making efforts to play a reasonable role.

● Creation of various connectedness

As stated above, the characteristic of ESD in Japan is focus on connectedness. There are quite a few opinions that ESD has acted as a bridge between the school, and the community and world. It is ESD that has linked the past and future, and teachers and children living in the present as well as linking in space, and the Declaration describes, “they have developed an awareness that they are the future change agents of society.” Many ESD lessons have encouraged imagination on how the current environment and social issues could influence the future. It is also remarkable that the prevalence of ‘the ESD Calendar’ has increased interdisciplinary attempts. Further, the contact and sharing of learning with the people in the Tohoku region who suffered enormous damage from the Great East Japan Earthquake, which occurred in the last half of the “Decade,” have been developed through ESD.

● Utilization of the Integrated Study Periods

As the Declaration states, experiential and inquiring projects utilizing the Integrated Study Periods and other subjects have penetrated, and the awareness of the importance of problem-solving learning has grown, which is an achievement. Subjects other than the Integrated Study Periods have also created a number of “regional studies and actions in the community,” which has lowered the barrier between the school and community. As discussed later, there is a tendency to stay in the Integrated Study Periods. However, it is significant that, through the experience of integrated study, children have developed the awareness as the “change agents of a sustainable society.”

● Awareness of disaster prevention

A major event that unexpectedly occurred during the “Decade” was the Great East Japan Earthquake. It is said that, in communities that have made daily efforts on ESD, ESD has contributed to the protection of the life of the local residents and to the advance of flexible reconstruction. Especially the approaches by Kesennuma City, Miyagi, including education for disaster prevention, are good practices of ESD from a global perspective. In those communities, ESD has raised the awareness of disaster prevention and disaster reduction, and ESD has further enriched one area among “climate change,” “biodiversity,” and “disaster prevention (disaster risk reduction),” which are the three major areas of ESD that have become highlighted in the UNESCO headquarters, etc. in the last half of the “Decade.”

2) Accomplishments which are on their way to be achieved

● Critical thinking

The fact that “projects and curricula were developed for identifying and resolving key issues in a hands-on, investigative manner” in the “Decade of ESD” is regarded as an achievement. However, “higher-order thinking skills” (International Implementation Scheme on ESD by UNESCO) including critical thinking skill which was advocated from the beginning of the “Decade” and mid-and-long term thinking skill are still on the way. Although such thinking skills were nurtured from the planning stage of ESD, and highlighted through the “Decade,” it has hardly been settled. Reflecting this, the Declaration only expresses that “it was understood that the ability to think and judge critically fosters.”

● Time consciousness

I can imagine for sure that quite a lot of students have started to be aware of “time” through ESD as described in the poem in the opening sentences. However, there has been little learning to develop mid-and-long term thinking skill on what kind of development in the past has caused the current non-sustainability as represented by global warming (climate change), and on how the modern lifestyles and behaviors in search of affluence, which would foster the current non-sustainability, have an effect on the future.

● Self-esteem and participation of students

There are quite a few children and teachers who have become active through ESD projects and actions. As the “Future We Want” Declaration in the “Rio Plus 20” emphasizes, the empowerment of the youth is a universal issue, and it can be said that specific cases to such issue arose in ESD. In that regard, the Declaration describes, “it brought out the inner strength of children in Japan regarded as having low feelings of self-esteem, and led to them gaining self-confidence.” However, it is worth thinking about whether it is temporary empowerment or not. As the Declaration promises to “illustrate transformation of students, teachers, schools, and communities through ESD to spread the ESD vision” in the “Commitment,” it is essential for students and teachers to be aware of “how they changed” through ESD on a daily basis, not “what they did,” and at least the transformation at the level of values and lifestyles is not fully shared.

● New roles of teachers

The declaration states that “A transformation occurred in the awareness of teachers guided by the ESD vision. Rather than merely communicating knowledge, teachers adopted an attitude of designing and coordinating child-centered study while learning together with their children. There were instances where this attitude changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community.” In other words, through ESD, a teacher has come to play a role as a designer, coordinator, and facilitator, not as a transmitter of knowledge. And yet, it is undeniable that merely the “instances” can be seen, and whether the horizon will be expanded in the future is a social mission expected of UNESCO Associated Schools.

● Transformation of oneself and society

The Okayama Declaration mentions that there were instances where teachers’ attitudes, which are changing while implementing ESD, changed the children, and changes in the children brought about changes in their school, which in turn brought about changes in the community. It is indeed one of a few achievements of the “Decade,” where we glimpsed a transformation from education which attempts to change others (students) to spontaneous education where teachers themselves change, and that leads to the change of their students, their schools, and the community. Such a sense of endogenous development into a sustainable society was emphasized at UNESCO in the last half of the “Decade” as “learning to transform oneself and society.” However, the prevalence of such an idea has just started.

3) Issues

● Approach toward global issues

The “Commitment” in the Declaration mentions cross-border global issues such as “climate change, biodiversity, disaster prevention, and sustainable consumption and production” as thematic learning and collaborative learning. The global issues above are the topics that the organizations to promote ESD, including UNESCO, have focused on internationally since the beginning of the “Decade.” However, Japan has rather focused on local communities, and has not made a full effort to solve global-scale issues. From an international perspective, this means that ESD in Japan is trivialized into community activities. The dynamism of ESD will be exercised only if we work on cross-border global issues such as climate change and biodiversity.

● Sustainable exchange and establishment of cooperation with neighboring countries in Asia

Did a project like the previously-mentioned Baltic Sea Project (BSP) emerge in Japan in the past decade? Although, during that time, the relationship in East Asia was never in a desired situation, I suppose that UNESCO Associated Schools were expected to launch a project, which makes an appeal for the importance of peace/non-violence as the philosophy of UNESCO, with the schools in the neighboring countries in such time. This is obvious in light of the missions advocated by UNESCO Associated Schools.

As described previously, ESD in Japan has conducted excellent activities in the community activities, and achieved considerable results. On the other hand, it has not proactively promoted problem-solving learning in cross-border cooperation with schools as seen in the BSP, etc. As the “Commitment” describes “thematic learning and collaborative learning together with UNESCO Associated Schools in neighboring Asian countries” as an issue, it requires learning from overseas good practices, and approaching the common issues such as climate change and mass-consumption society together across the sea in East Asia.

2 There is a hopeful sign that Asian countries have been launching joint education projects to promote ESD across borders. For instance, you can see from ESD Rice Project (Regional Initiative for Cooperation for ESD Promotion through Rice). See <http://esdriceproject.com> for more details.

● Sustainable consumption and production

One of the expressions that are not included in the “Outcomes” but in the “Commitment” in the Okayama Declaration is “sustainable consumption and production.” This is the fourth topic which was added right before the End-of-decade World Conference in addition to “climate change,” “biodiversity,” and “disaster prevention (disaster risk reduction),” which were highlighted in the last half of the “Decade” by the UNESCO headquarters as specific approaches of ESD. This was also inserted in the Okayama Declaration in the final phase. Assuming that the key concept of ESD is to transform oneself and society as stated previously, even though you acquire the knowledge on sustainability, you will somehow implement contrived ESD if your behaviors and lifestyle are against it. Teachers themselves are expected to conduct “sustainable consumption and production” activities according to ESD first, and to learn and act with their students after internalizing awareness of issues.

● Transformation in values, behaviors, and lifestyles

The International Implementation Scheme, which is the most important document to evaluate the “Decade”, describes that ESD is required to transform the values, behaviors, and lifestyles for a sustainable future. It is worth noting that the word “transform” which indicates the change is derived from its own culture, is used here instead of the word “change” which indicates transient shift. Indeed, there may have existed classes where actions by children could be seen. However, it is essential to see whether it is temporary or not. Even when a student saves water or electricity at school through ESD, the student is likely to waste them at home or in the community if his/her values have not changed at a deep level. Although problem-solving skills have been made use of by ESD, it should be transformed into the values that will not produce a problem in a deep level, not just solving a problem. What is asked is whether ESD (value of ESD) resides in teachers and students or not; that is to say, whether “they live with ESD values” or not.

3. Conclusion

Issues other than those above can possibly be pointed out as the challenges of UNESCO Associated Schools. For example, there are some areas where the issues that should be approached with awareness as the UNESCO Associated Schools, such as a gender issue, are practically untouched. The gender issue appears as part of issues instead of part of outcomes in the Declaration.

The “Commitment” mentions, “through dialogue and cooperation with various players, we will link together the five priority action areas in the Global Action Programme (GAP) on ESD, which is a follow-up to the UNDESD” for the GAP itself, where the importance of synergistically connecting each area of the policies, efforts through the whole organization including schools, teachers, youth, and community is explained.

As the International Implementation Scheme describes, ESD assumes a mission to transform learning, which has been divided in the process of

modernization, into a holistic activity. Nevertheless, the GAP describes a structure, which seems to say that five areas are separate in action. In this regard, it is essential to advance the GAP without dividing the policies and implementation, school and community, and teachers and youth in order for Japan, an advocate of ESD, to play a role of a good leading force for the GAP. This is also an issue of the awareness of the teachers in the field as well as the policy decision makers. For example, sensibility to synergistically connect the areas of the GAP, including the policies and youth, school and community, which apparently seem independent, is required.

Hopefully, in this manner, each UNESCO Associated School and ESD-related organization will deepen the dialogue on past and future ESD by utilizing the Declaration as a material on the occasion of the completion of the “Decade”.

Finally, I would like to conclude this discussion with mentioning the poem in the opening sentences. I stated that the poem “has captured the heart of ESD” at the beginning. The reason is clear. The International Implementation Scheme, which was established by the UNESCO headquarters when the UNDESD started, stipulates the goal of ESD as the “re-orientation” of traditional education. It is, needless to say, the orientation to a sustainable future. In other words, the original purpose of ESD is to transform the way of conventional education, which has influenced the values, behaviors, and lifestyles that are making the global community unsustainable, by sharing the ESD vision.

In fact, I was truly regretful that there had been no full-scale evaluation of ESD by checking with the International Implementation Scheme even at the End-of-decade World Conference, because I was engaged in monitoring and evaluating the implementation of ESD in various regions at the UNESCO headquarters during the “Decade” as a member of the ESD Monitoring and Evaluation Expert Group. In that sense, I am grateful for the poem, which has provided an opportunity to reconsider the heart of ESD, and it has been a relief that such a message was delivered by a UNESCO Associated School.

Education might be a product that has been formed while compromising on various kinds of reality. However, if you stick to the reality too much, that will become training instead of education. Recent skills development valued focusing on global human resources can be seen as a typical case. Education is not a synonym for human resource development. As different educational declarations state, I believe that wisdom to guarantee character formation specified in the Japanese Fundamental Law of Education (Article 1) in some way is crucial so that education stays in the way it should be. One aspect of such wisdom should be the sharing of words to provide a “vision (dream!)” for us, who tend to stick to the real world. Nowadays, the cultivation of the application focusing on globalization and useful knowledge has been advocated more than ever. Under such a trend, it can be the most important issue of post-2014 to take ESD as a vision.

³ ‘Aichi-Nagoya Declaration on ESD’ also emphasizes that the five priority action areas of GAP should be strengthened in a synergistic manner (article 13). See http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/ERI/pdf/Aichi-Nagoya_Declaration_EN.pdf

Learning can have three connectedness by incorporating the philosophy of ESD with children's learning. In such connections, learning increases its values, which will remain in the mind of children, and will be a source to create a sustainable future.

- **Connectedness with people in children's learning**

I am connected to you, to everyone at school, to everyone in the community, and to everyone in the world.

Therefore, even though you are hidden from my view, recognizing the value of my role in encouraging each other and supporting each other makes me want to do something.

- **Connectedness with space in children's learning**

My world extends from here to there, from the classroom to the schoolyard, from the schoolyard to the community, from the community to my country, from my country to your country, and then further to the world and to the earth.

Note: the message (poem) sent by Inagidaini Elementary School, Tokyo, a UNESCO Associate School and shown above was slightly revised at the drafting stage with the consent of the school for putting it at the beginning of the Declaration.